

センター つみん



高橋源一郎さん 高校生公開授業より

目次 2024年3月

子どもの風景 (第13回)	1
特集 授業づくり・学級づくり	
子どもの心を解放した「せいのランド」	
制野 寛	2
学校での語り部活動	小山美知子 6
高校生による「戦争画」制作	豊永 敏久 8
提案 物語の授業をどう創るか	小野 剛 11
報告 高橋源一郎さん高校生公開授業	16
「ぼくらの学校なんだぜ！」	
わたしの出会った先生 43	森下 瑛仁 20
子どもと学校	
コロナ禍が終わった教室で	柘 圭一朗 21
教育時評	
学校の教育「環境」問題	山沢 智樹 23
授業への招待⑬	
日記・作文で子どもを丸ごととらえる	
小澤 登	24
おすすめ映画	大山あけみ 26
読書のすすめ (第15回)	矢部智江子 26
相談センター報告 (第34回)	松谷三喜子 27
ひと言	高橋 正行 28
子どもの風景 作品について	川村 美和 28
センターの動き・編集後記	28

ぼくは、雪あそびが大好きです。一月二十三日に雪がふりました。

昼休みに外に出て、さいしよは雪がつせんをしました。まなくんとりゅうくんできました。雪がつせんがあきたら、三人でちっちゃい雪玉から大きな雪玉を作ろうと思ったら、チャイムがなったので中に入りました。

またほうかごにきてみたら、雪玉がこわされていました。くやしかったです。

雪あそび

あお(小3)

子どもの風景 第13回

子どもの心を解放した「せいのランド」

制野 寛

1 実践のねらい

本実践は、私がこのクラスを担当してすぐに感じた「何かを本気で取り組むことへの抵抗感」や「体育に対するマイナスイメージ」を拭いたという思いで行った。

4月、6年生担任は初めてだったため、子どもたちがどんな反応をしてくれるのだろうかと大きな期待を胸にクラスに入った。その思いとは裏腹に、子どもたちは、聞く姿勢はよいのだが、楽しい話をしているつもりが、反応は薄く、視線も冷たかった。「なにか聞きたいことがある人？」と聞いても手を挙げる人はいなかった。授業中も挙手をして発表する子は2、3人程度であった。また、男女の仲もあまり良くなく、クラスのアンケートでは、「喧嘩が多い」「男子がうるさい」「女子が面倒くさい」という意見が多々あった。さらには、男子からの嫌がらせがきっかけで5年生で不登校（年間60日程度）になった女子もいた。

体育の授業でも、男子は楽しそうに行う一方で、女子は何をするにしても恥ずかしがったり、面倒くさそうな子がいて、一体感がなかった。また、女子の中で、たとえ体育が好きであっても、それを言える雰囲気はなく、実際に5月の運動会前に、「体育が好きな人？」と聞いたときも、

女子で手を挙げている子はいなかった。しかし個別の三者面談で体育が好きという女子が数名いた。

これらの実態を踏まえ、「教師と子どもとの信頼関係を築くこと」「男女の仲のよいクラスをつくること」を基盤とし、まず、体育を通してクラスの違和感を吹っ飛ばす「せいのランド」を実施しようと考えた。また、それをきっかけに、フワッと感を実感できる走り高跳びへつなげていこうと考えた。

2 授業計画

せいのランド（10～12月）〈次ページ表〉

3 授業の実際

【1時間目 台車でガツン】

「大盛り上がり・大はしゃぎ！」

「今日からとにかくはっちゃけるよ」と授業の初めに子どもたちに伝えた。「え？ 授業じゃないんですか、やったー」と、はしゃぐ男子と「？？」となる女子。

初めは、マット運動でからだを動かし、後半に「台車でガツン」を行っ

1 5	<p>◆せいのランドの準備 ○様々な動きを体験しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・台車でガツン ・平均台遊び ・バランスボール ・バトン投げ ・跳び箱ジャンプ ・壁登り
6 7	<p>◆せいのランド ○様々なアトラクションで遊ぼう 「跳ぶ」「浮く」「走る」「登る」 「バランスをとる」「投げる」 「はしゃぐ」</p> <p>※ケガには十分気を付ける</p>
8	<p>◆大ジャンプ ○リズムカルな助走から踏み切って、大ジャンプをしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・跳び下り ・三段高跳び <p>⇒後半の高跳びに繋げる</p>

た。男子は最初からはしゃいでいたが、女子は予想通りなかなか始めようとしなかった。しかし数分もすると、楽しそうにしている周りの友だちの様子に「私の番来ないかなー」とびよんびよん跳ねながら台車に近づいてきた。男子はそれを見て、「女子乗りなよ」と台車を次々と押しあげていた。押される方が楽しいのはもちろん、押す方もこの感覚を友だちに体感してほしいと楽しんで押していた。

ガツンと打ち付けられ、体を前に放り出される感覚に、男子も女子も大はしゃぎ。中でも印象的なのは、おとなしい子たちの反応だった。Rさん（緘黙の男子）は、基本的に感情を表に出さず、体育ではやるべきことを淡々とこなすような子である。そんなRさんが、友だちの押されているのを見て、興奮してジャンプしながら走って台車に近づいてきた。こんなに興奮している姿は初めて見た。自分の番が来ると少し緊張した様子ではあったが、台車がぶつかる瞬間の衝撃に笑顔がこぼれていた。



ろ」とはしゃぎながら戻っていった。
感想カードには、「初めての感覚だった」「体が飛んだ」「ジェットコースターみたいだった」「楽しかった」と書く女子が多かった。

【2時間目 平均台遊び】

「バランスを取るのが難しい平均台」「台車でガツン」が盛り上がりすぎたのか、「平均台遊び」の反応はそこそこ。2人組でボールを背中に挟んで進んでいく遊びや平均台の上で順番を入れ替える遊びなどをした。楽しそうにしている子がいる反面、うまくいかずに途中で諦める子もいた。しかし、自由時間には、どうしても成功させたいと、おとなしい女子たちが何度も挑戦していた。

【3・4時間目

バトン投げ＋跳び箱ジャンプ】

「シュートと飛んで気持ちがいい」
投力の低い子どもたちが初めて「バトン投げ」にチャレンジした。なかなか前に飛んでいかないバトンだったが、うまくできる子がシュートと投げると「おー」と盛り上がる声が聞こえてきた。ボールと違い、「二直線に飛んでいくバトン投げは気持ちがいい」と感想カードに書く子もいた。



初めて味わうフワッ感にドキドキ、「ライダーキック」に拍手喝采、ステージの上に2段の高さの跳び箱を設置し、そこからステージ下のマットに跳び降りる「跳び箱ジャンプ」をした。私としても驚きだったが、子どもたちは、高いところからジャンプした経験がほとんどない。

最初は、男子ですらなかなか跳ぼうとせず、女子は全く跳ぼうとしなかった。盛り上げ系の男子が数名挑戦し、「すげー」「こえー」と楽しそ

うに跳んでいるのを見て、徐々にみんなが跳び始めた。そして数分後には、男女ともに楽しそうに次々と跳んでいた。中には、自分なりのポーズをとって跳び始める子も現れたため、ライダーキック跳びを教えた。運動神経のよいKさんがさっそく挑戦し、うまく決まると、賞賛と笑顔の拍手喝采！……あれ？ 意外とライダーキック跳びやポーズ跳びは盛り上がるかも……。

6、7月の子どもたちを見てみると、盛り上がる気が全くなかったが、今回の盛り上がりとは反応を見ると、意外とはしゃげていて安心した。

感想カードには、「フワツとなった」「浮かんだ時が一番楽しかった」「スリルがあった」など、普段経験できないフワツと浮く感覚を楽しんでいる感想が多くあった。

【5時間目 壁登り】

スリル満点全身で駆け上るのが楽しい！
体育館の壁にエバーマットを立てて、ロー

プにつかまり壁を登っていく「壁登り」をした。駆け上がる脚力だけでなく、ロープをしっかり掴んで登っていく腕の力など必要であるため、なかなか上まで登るのは難しい子が多かった。そして、男子も

女子も自然と「頑張れ！」「もう少し」と応援する周りの子の姿が見られた。

感想カードにも、「今まで登ったことのない高さでドキドキした」「届きそうで届かないので悔しくて、何度も挑戦した」など、挑戦することの楽しさに気付く感想もあった。



【6・7時間目 「せいのランド」本番】

「体育なのにこんなに楽しくていいの！」

2学期末にこれまでに行った種目を自由に遊べる「せいのランド」を行った。「せいのランド」が始まると、子どもたちは、自分がもったりしたかった種目をこれでもかというほど楽しんでた。

中でも、Rさんは、「台車でガツン！」の場所へ真っ先に向かうと、友だちが乗っている台車を自分から押してあげ、自分も押してもらっていた。また、普段は男子に対して抵抗があり、毎日男子の愚痴をこぼしている女子も感想では、「押してくれる優しい男子がいたので、ずっと押してもらいました」と書いていた。この子が、男子にポジティブなコメントを書くことは今までになかったため驚いた。特にこの「台車でガツン！」は「一人ではできない」という要素が友だちとの関わりにより影響を与えていた。

他の感想では、「達成感があつてすごく楽しかった」「ハラハラ感があつた」「いつもの体育とはまた違うような感じ」「普段できないようなことばかりだった」というような非日常感を味わった子や「友だちとの団結力を極めることができた」「みんなとの仲が深まった」など友だちとの関わりについて書く子、そして何より、「体育なのにこんなに楽しくていいの」「2学期の最後の体育が一番楽しかった」という「せいのランド」自体を楽しむ子の感想が多かった。

今回の「せいのランド」では、私が予想していた以上に子どもたちの様々な姿が見られた。そしてその時間は、男女関係なく、子どもたちが恥ずかしさを捨ててはしゃいでいた時間だった。特に普段おとなしい女子が、できたという達成感を味わっている様子や、男女関係なく台車を押してあげている様子が印象に残っている。この「せいのランド」が子どもたちにとって、体を動かすことへの抵抗や恥ずかしい気持ちの解消のきっかけになったと同時に、男女仲のよいクラスの姿を見せてくれた。

4 その他の活動や成果について

子どもたちのこのような姿を見られるようになるまで、担任として子どもたちと本気で向き合うことや日頃からちよつとした仕掛けを用意することを心掛けたことも「せいのランド」につながったと思う。少し紹

介したい。

★ビー玉貯金

誰かのためになることをしたときにカードをあげ、5枚溜まるとビー玉に交換できる。クラスのビー玉貯金箱がいっぱいになると、お楽しみ会を行ったり、宿題をなしにしたりする。4月から積極的に行い現在までに4回貯金箱が溜まっている。

★毎月の目標達成度アンケート

学級目標である「史上最強のクラス」に対してクラスはどうか、点数をつける。そして、クラスに対して思っている良いことや直していきたいことを全体で共有し、毎月の目標を立てていく。(保護者にも知らせる)

6・7月(71・8点) ↓9・10月(77・3点) ↓11月(81・1点)
↓12月(84・7点)

★文化祭の「千と千尋の神隠し」の劇

10月下旬に文化祭があった。6年生では、ジブリの「千と千尋の神隠し」を行おうと提案したところみんなが賛成してくれた。ただ劇を行うのではなく、こだわった演技をするために、舞台の千と千尋のDVDをみんなで観賞し、セリフのない人物の動きまで細かく研究をした。その結果、舞台は大反響で、保護者の感想では、「6年生の演技力に感動した」「クオリティが高かった」との声が多く寄せられた。また、「泣きそうになった」と話してくれる保護者もいた。これを機に、クラスの雰囲気がいよいよよくなった。

★グループ学習

2学期初めに社会の授業で、歴史人物について調べ、グループでまとめていく活動をした。そのときに、普段は他の人とのコミュニケーションを嫌がる女子が突然「先生！今日の社会の授業、今までで一番楽しかった！」と話した。「なんで？」と聞くと「なんか分かんないけど、みんなと話しながらできたから」と答えた。「話しながら」というのも課題解決のための話し合いのことを指していたため、これも学級づくりに使えると考えた。算数では、「先生に教えられるより、みんなでやっ

た方ができるようになる」とまで言われたこともあったが、それでいいと思う。

5 子どもの変化

★5年生で不登校だった子について

5年生の時、友だち関係で悩み、年間6日程休んでいた女子は、6年生になり、また3日しか休んでいない。あんなに内気だった子が、自ら町の弁論大会に出たり、仙台で夏休みに行われた「いじめフォーラム」に参加したりした。12月の三者面談では、「学校が毎日楽しいです！」と嬉しそうに話しており、教員との信頼関係や友だち関係がよくなったのではと感じた。保護者も驚いていた。

★Rさんの変化

実践記録の中にも書いたが、感情を表に出すようになり、友だちとも関われるようになってきた。最近は朝の会での1分間スピーチを小さい声ではあるが、頑張つて話すことができるようになった。

6 最後に(2学期を終えて)

前年度は、パワフルな3年生を担任し、どのように落ちついて授業を受けさせるか、ということをして1年間考えていたが、今のクラスでは打って変わって「どうしたら授業を盛り上げていけるか」ということを考えて過ごした。

4月当初はクラスの雰囲気不安を感じていたが、今は卒業を考えるとき寂しい気持ちになる。1月9日始業式の日「めんこくなったよね6年生。5年生までは、大人に不信感?があるような感じがしていたのに、本当に素直になったね」と養護教諭に言われ、頑張った甲斐があったなと嬉しく思った。

(石巻・女川小)



「おばあさんから孫たちへ」(1)

学校での語り部活動

小山 美知子

2023年度の語り部活動

コロナ禍の3年を経て、4年ぶりに語り部活動を再開することができた。13校15コマの授業を実施した。出会った6年生は、692名。白萩の会中央支部の語り部は、のべ309名だった。(平均20名参加)

一昨年、宮城野高校の美術科のみなさんに依頼し制作してもらった絵画を使い「この絵は、宮城野高校の生徒さんが描いてくれたものなのです」と紹介しながら、語り部活動を進めてきた。以前使っていた絵は、「おばあさんから孫たちへ」の本の中の挿絵を拡大コピーして、色鉛筆で彩色したものだった。長く使い続けてきたので新しく作り直したいという時期に、宮城野高校の美術科のみなさんに快く引き受けていただいたのだった。今まで使っていたものとは存在感が全く違う。

改めて高校生の方々に感謝の気持ち湧いてきた。若い人たちに語り部活動を見てもらい、関心をもってもらったことも大きな意味があったと感じている。絵は筒状の入れ物に巻いて収納しているので、授業で使う際には平らになるように掲示係の人がいろいろ工夫をしてくれた。

語り部活動の草創期

「おばあさんから孫たちへ―宮城の戦争―」ができるまで

戦後50年経った1995年頃、戦争を体験した先輩のみなさんが戦前の政治状況に似てきたという危機感を感じたことから、戦争を知らない

若い世代に戦争の悲惨さや無意味さを伝えなければならぬと考え、ファイル本「おばあさんから孫たちへ」を170部作ったことから学校での語り部活動は始まった。

ファイル本は、白萩の会(退職女性教職員の会)の会員が自分(当時国民学校の子どもたち、女学校や師範学校の生徒、学校を卒業して教員や看護婦として働き始めた)の戦争体験を記した原稿を集めたものだった。授業で使ってもらいやすいようにファイルにしたという話だ。自分の戦争体験をもとに、小中学校や諸団体に語った人たちが大勢存在していたことが、記録を見ると分かる。

10年経ち2005年3月1日「おばあさんから孫たちへ―宮城の戦争―」の冊子本を中央支部が編集委員会を重ね、編纂して自費出版した。前年にイラク戦争に自衛隊が初めて派遣されたことに衝撃を受けて、戦争体験を風化させることなく語り伝えなければならぬと当時の中央支部の役員が決意したことによる。ファイル本では原稿が散逸してしまうと考えたのだった。1冊1000円で販売したが、県内の小中高校全てに寄贈した。初め7000部発行したが完売し、2000冊増刷。現在ほとんど残部がなくなっている。



合唱組曲「おばあちゃんから孫たちへ」の誕生と

「歌とお話の会」のスタート

2006年9月、合唱組曲「おばあちゃんから孫たちへ」全8曲が完成した。「おばあさんから孫たちへ」の本を宮城のうたごえ協議会の音楽アドバイザーだった小林康浩氏に差し上げた会員がいて、小林氏から作曲させてほしいという申し出があり、役員会で承諾し作曲にいたった。

その後2008年5月に「白萩版」3曲が、2010年9月に「おじいちゃんから孫たちへ」4曲が作曲された。この合唱曲ができたことにより、語り部活動の形が大きく前進した。戦争体験の語りだけでなく「歌とお話の会」と名づけて合唱も組み込んで実施することができた。話だけでは子どもたちの集中力を持続させることが難しいが、歌を交えて語ることによって、印象が強くなった。2007年度から記録が残っている。小中合わせて4校だった。2009年度は小学校6年生を対象に5校、2011年度には7校と徐々に増えていった。この年は児童総数555名となり、語り部はのべ105名だった。

小学校6年生対象の語り部活動の進化

① 使用する曲選び

どの曲を歌うことが「戦争」というものを子どもたちに理解してもらうためにより効果的か、試行錯誤しながら現在の5曲（一部繰り返しは省くなど工夫）に定着してきた。

作曲者の小林康浩氏の編詩が、原文「おばあさんから孫たちへ」の内容を的確に表現していて、メロディーとともに戦争時代の状況やそこに生きる人々の心情まで伝えている。戦争中とはあまりにもかけ離れた生活をしている子どもたちの心にもすんなりと届いていることが、その表情や感想文から読み取ることができる。毎回音楽（合唱）の力を痛感している。

② どのように臨場感を出すか

パフォーマンス（寸劇）を入れる

学生時代演劇部だった人が複数いて、パフォーマンスを始める

1曲目♪「開墾して食糧増産」「白萩版」から食糧難で子どもたちも開墾

作業をする絵

曲の途中で「空襲だ！ おつかねえ！」と地べたに伏せる↓全員頭を抱えてしゃがむ（2015年度から）

2曲目♪「世界で一番砂糖が好き」「おばあちゃんから孫たちへ」から

歌の直前に、

子ども「母ちゃん、母ちゃん、腹

減った！」

母「我慢して、何にもないんだ、

夜に大根めしするから

ね」

子ども「また大根めし、やんだ

〜！」

ほんのちよつとの砂糖を初めて食べて感激する5歳の男の子の

歌

3曲目♪「無言の凱旋」「白萩版」出征を祝

う絵 遺骨を迎えに行く絵

戦前の秋保駅に戦死した兵隊さ

んの遺族と一緒に子どもたちも

遺骨を迎えに行く歌

4曲目♪「あれから、今も」「おじいちゃん

から孫たちへ」

戦争中兵隊だった人に扮して（実

際の軍服を着用）、若い人に向け

てメッセージを語り、ソロで歌い

始める。（2015年度から）

5曲目♪「語り部として」「白萩版」から

授業が終わった後、歌いながら子

どもたちを送ります。

（2018年度から）



③ 掲示物の工夫

- ・導入での年号や戦争名を大きく太字にして見やすくする。
- ・地図を拡大して、日本が戦争によって占領した地域を赤いカードで貼る。
- ・本の中の挿し絵を拡大コピーして彩色する。(2014年度) ↓宮城野高校生徒の絵画(2023年度)
- ・まとめて使うカードが少しずつ増加してきた。

④ 時間の管理

45分の授業内に収まるように、タイムキーパーをおき、語りの人に残り時間を示す。

⑤ 係の分担は毎回変わる

- 掲示係は従来2人だったが、2023年度から4人態勢となる。
- ほかに進行係・導入とまとめの係・戦争体験の語り・計時係・パフォーマンス担当(空襲、た！・子どもと母ちゃん・兵隊)がある。ピアノと指揮は毎回同じ。
- 白萩の会に入会して日が浅い会員も積極的に分担し、各担当が互いにフォローしあって進化を続けている。

これから更に工夫を重ねて、語り部活動を拡大していきたいと話し合っている。

(退職女性教職員の会 宮城白萩の会中央支部)

「おばあさんから孫たちへ」(2)

高校生による「戦争画」制作

豊永敏久

絵の制作依頼

「白萩の会」の小山美知子さんから電話がかかって来たのは、新型コロナウイルス感染拡大の第7波が取り沙汰されていた、2022年7月末でした。「語り部活動で使っている絵(出征兵士の見送りの場面、遺骨をお迎えする場面など、模造紙の大きさの水彩画3枚ほど)が古くなってきたので、高校の美術部の生徒さんに新調してもらえないか」との依頼でした。

高校生が戦争を題材に絵を描く取り組みとしては、広島市立基町高校美術部の「原爆の絵」の制作活動が全国的に知られ、私も仙台市内で開催された展覧会を見に行ったことがあったので、とても素晴らしい企画と思いい、協力を約束しました。

宮城野高校美術科に依頼

私は宮城野高校に勤務しており、宮城野高校は県内で唯一「美術科」のある高校なので、最初は「美術科に依頼する」ことを考えたが、あい

にく美術科は多種多様のコンクールに出品するなど生徒たちは結構忙しくしている。当初は「多忙な美術科には余裕がないかもしれない」と思いました。

そこで、私は高教組本部書記局の非専従役員もしているため、「組合員で美術部の顧問をしている先生がいたら、その生徒たちに頼めないかな」と思い、

高教組書記局に照会しました。しかし数日後、「高教組の組合員に美術の教員はいない」との返事。「それなら、やはり宮城野高校の美術科に掛け合ってみるしかない」と決意し、夏休みが明けた数日後に、当時美術科主任だった伊藤隆文教諭（以下、伊藤先生）に相談してみました。そうしたら幸いにも、伊藤先生は私の依頼を快く受け止め、企画が動き出しました。

さつそく8月末に小山さんはじめ「白萩の会」の方々が宮城野高校に来られました。伊藤先生と実習助手の先生が応対し、これまで使用してきた絵を見せてもらいました。そして生徒が描く際の画材や絵の具などについて相談し、企画の詳細が決まりました。

「語り部活動」の授業を受けたのち制作に着手

依頼された絵を描くには、その絵がどういう企画の中で使われるのかを知る必要があります。そこで、生徒たちに実際に「語り部活動」の授業を見てもらうことになりました。10月19日の放課後、「白萩の会」のみなさんが宮城野高校に来て、絵の制作に関わりたい生徒たちが集まりました。最初は伊藤先生から「数名は集まりそうだ」との返事だったので少々残念に思っていたのですが、開演時刻が近づくにつれて



次々と生徒たちが集まってきて、最終的には美術科1〜2年生のみならず普通科の生徒も含めて40名以上が集まり、会場の音楽室は席が足りなくなるほどの満員となりました。「こんなに集まってくるなら、事前にテレビ局や新聞社にリークしておくのだった」と悔やまれたほどでした。その後、生徒たちによる制作が始まりました。

完成披露と引き渡し

約3か月を経て2023年1月19日に完成披露と引き渡しが行われました。美術教室で「白萩の会」のみなさんに3枚の絵を披露したら、たいへん喜んでいただけました。「白萩の会」のみなさんからお菓子と飲み物をたくさん頂戴し、遅くまで茶話会が続きました。



「戦争画」制作に取り組んで

宮城野高等学校美術科教諭 伊藤 隆文

この度、戦争画を描かせていただける機会をいただいたこと大変貴重に感じております。始めは、どのような絵柄を描いたら良いのか、どのような場面でどんな人たちに見てもらえるのかを考えながら試行錯誤いたしました。語り部活動をされる様子を実際に見学させていただきました。お話を伺った中で、どのような作品にしたらよいか生徒たちがおのおの考えながら制作に臨むことができました。また、「2023子どもの未来をひらくみやぎ教育のつどい」に生徒たちと出席した際には、異年齢交流を踏まえた価値観の共有をさせていただき大変貴重な機会になりました。今回の経験を経て、生徒たちが今後自分たちの作品や行いが人にどう伝わっていくのか、ということを強く意識できる貴重な機会となりましたこと、誠に感謝しています。ありがとうございました。

戦争画の制作を通して授業で学ぶことのない人々の生活や出兵の様子を知る事が出来た。戦時中の事を覚えていてる人が段々と少なくなっているが戦争画を通して知ってもらえたら良いなと思うし、自分たちも力になれて嬉しいと思った。自分たちの生まれていない当時の様子は知らない事が多く、表現するのが少し難しかった。知る事が大事なのだと、そして戦争について改めて考える良い機会になったと思います。

佐藤 ひかる

佐藤 優菜

自分は戦争について知っているようで何も知らなかったのだなどこのワークシヨップを経て感じました。また、

絵がどれだけ必要とされているのか、どんな力を持つのかについても理解でき、自分のこれからの繋がる考えを持てました。戦争の酷さについて理解し、戦争は二度と起こってはいけないのだと、戦争は罪のない人たちを大量に殺す人間の悪い行いなのだ、改めて戦争の悪さや人々の願いを理解できました。かつての画家たちも戦争画で訴えたように、語り部のみなさんが語り紡いでいくように、私も私の方法でこのことを紡いでいきたいです。

伊藤 碧泉

戦争画を描くという貴重な体験ができてよかった。最初は「戦争を体験していない、知らない私にできるかな」と不安だったが、そのおかげで戦争について調べる機会ができた。また機会があったら参加したい。

佐々木里緒

絵をとっても喜んでもらえていたのが印象



的で取り組んでよかったと思った。

知らない世界に飛び込んでみるみたいで貴重な経験になった。

岩佐 姫奈

今まで戦争画についてあまり知識がなかったので今回の体験で深く考えることができ良かったです。戦争を体験してない私たちが描いたので人の表情や色で戦争の雰囲気を出すのに少し苦労するところがあったのですが、描く前に聞いた語り部さんたちのお話を参考に戦争の雰囲気や当時の人たちの気持ちを絵でしっかり表現できるように頑張りました。私たちが描いた戦争画が語り部さんたちの手助けにもなってもらえたら嬉しいです。

佐藤 里湖

教科書の中では、国のトップたちの話しか載っていないかったり、1行程度で終わってしまっている民衆たちの話が、当事者の方々から当時のことを鮮明に教えてもらったことではじめて戦争の悲惨さだったり状況が知れたなと思いました。

高橋 季里

描くことによつて背景はどうするか、開拓した山にはどんな植物が生えていたのか、当時の人々はどんな服を着ていたのかなど細かく当時の状況を考えるきっかけになりました。戦時中の人々の生活は戦場へ向かった兵士同様に国民が一体となつて一人ひとりが懸命に生きていたんだなと思いました。戦争はダメ絶対。

(宮城野高校)



提案 物語の授業をどう創るか

小野 剛

平成29年度版学習指導要領の国語科で新たに導入された、「構造と内容の把握」「精査・解釈」「考への形成」「共有」という学習過程によって、「主体的・対話的で深い学び」が実現するといわれています。

指導要領の物語（文学的な文章）における「構造と内容の把握」に目を通すと、「低学年では場面の様子や登場人物の行動など、中学年では登場人物の行動や気持ちなど、高学年では登場人物の相互関係や心情などを捉えること」という旨の記載があります。

更に、指導要領の内容を具現化する、東京書籍・光村図書・教育出版・学校図書の学習の手引きを見比べると、「構造と内容の把握」の底流にある「場面」の指導が、1年生や2年生とばらつきがあり、実技教科のよいうな「2年ひとくくり」の扱いとなっています。統合すると、場面、物語、教科書で何を教えるのか見えてこないのです。国語が「曖昧な教科」と言われることと無関係ではないように思います。

そこで、みやぎ教育文化研究センターをはじめ、様々な学習会や文献、先輩方の教えで得た学び、拙い実践の反省から、今の自分なりに解釈した、物語の学習過程を提案したいと思います。

令和6年度版、2年度版の4社の教科書を照らし合わせ、何学年の学びが妥当なのかが分かるように、 を付けています。今回は、イメージを持ちやすいように、4社共通で1年生の学習材に採用している『おおきなかぶ』をもとに、高学年をベースに、どのように学習を展開していけばよいのかを述べます。（どの物語

にも汎用的に通用します。）中・低学年であれば、上学年の内容を問引いていきます。

物語を学び始めた頃の自分を思い出しながら、子どもと教師の思考の流れに沿った授業づくりができるようにまとめました。これから物語を学びたいと思っている方の、入門編となれば幸いです。

まず、年間複数ある物語単元の1時間目には、『おおきなかぶ』や『うさぎとかめ』といった起承転結が明快な、ごく短い物語の読み聞かせを織り交ぜながら、物語を読む意義を子どもたちに伝えていきます。（高学年版です。低・中学年は、後述の学習過程に合わせて意識します）

◇「物語を読む意義」

物語は、「作者が『心』を込めて作った作品」です。その作品には、「中心人物」が登場します。中心人物とは、「物語全体で大きな変化を描く人物」のことです。その「大きな変化」は、「山場」で描かれます。山場とは、「中心人物に関わる大きな変化が描かれる場面」のことです。

物語全体を「繰り返し」「詳しく」読むことで、遠く離れた言葉と言葉がつながっていく、「中心人物の山場での大きな変化」が見えてきます。すると、物語は私たち人間が生きる上で大切

なこと、「作品の心」を語り掛けてきます。それを、「主題」（以下、低・中学年は形式上「感想」といいます。「主題」を得ることが、物語学習のゴールです。

また、「仲間と」読みを語り合い、聴き合うことで、新たな考えを知ることができます。

そして、普段の一回きりの読書、あるいはドラマや映画、劇の鑑賞といった長い物語からでも、「中心人物の山場での大きな変化」を中心とした「主題」を得られるようになっていきます。

「言葉の力」「生きる力」を身につけ、そこに面白さを感じるために、私は国語の授業で「繰り返し」「詳しく」「仲間と」短い物語を読むのです。

高学年の子どもたちに『おおきなかぶ』を読み聞かせると、「かぶを植えたおじいさんが中心人物」「おじいさんのかぶが抜けたのが山場」と、物語の骨子を捉えることができるでしょう。「主題」を問えば、「協力の大切さ」と答えます。

このように、物語は1回きりの読書からでも「主題」を得られる「作品の力」を持つています。ただし、「協力」を起点に「最後に協力したのは誰かな?」「ねこがねずみを呼んだのはなぜかな?」などと問うことで、物語を読み返す時間が生まれます。その結果、「小さな力の大きさ」「友だちと仲間の違い」といった、掘り下げられた「主題」を得ることができます。

本来なら、「中心人物」と「山場」を予想させた上で、1回きりの読み聞かせのもとに「主題（〇〇の大切さ）」を組み込んだ簡単な初発の感想文を書かせています。物語を読み終えて書く後発の感想文と読み比べた時に、「物語を読む面白さ」が感じられるよう、「繰り返し」「詳しく」「仲間と」読むことを大切にしています。

ここで、物語の学習過程を確認しておきます。（ここまで、①～④に触れてきました）

①「物語を読む意義」の確認……以下、⑧まで「物語の大体を読む」段階

- ② 「物語作品」との出会い
- ③ 「中心人物」「山場」の予想
- ④ 「初発の感想文」の検討
- ⑤ 「小さな場面分け」の検討
- ⑥ 「人物」「視点」の検討
- ⑦ 「大きな場面分け」「中心発問」の検討
- ⑧ 「あらすじ」の検討
- ⑨ 「中心発問」の精読……以下、「物語の詳細を読む」段階
- ⑩ 「後発の感想文」の検討

物語は、「中心人物の山場での大きな変化」を描きます。⑦「山場」を含んだ「大きな場面分け」を検討するためには、⑥「中心人物」を含んだ「人物」を検討しなければなりません。

「人物」は、「時」「場」「状況」と同列をなす、⑤「小さな場面分け」を検討する観点の一つです。『おおきなかぶ』なら、「おじいさん」「おばあさん」「まこ」「いぬ」「ねこ」「ねずみ」と、かぶを抜こうと加わる「人物」が変わり、絵が変わるたびに「小さな場面分け」がなされています。

「小さな場面分け」に取り組み中で、中心人物が誰であるのか、そして、その人物に関わる「時・場・人物・状況」の「変化の全体」が読めてきます。「中心人物の（山場での）大きな変化」を捉える前提として、「小さな場面分け」の検討が必要となります。

箱囲みのことを子どもたち向けに説明した後、指導内容をまとめます。

◇「小さな場面分け」の定義 低学年

- ① 新しい場面になるときは、「形式段落」と共に変わること。
- ② 新しい場面になるときには、「時（いつ）」「場（どこ）」「人物（だれ）」「状況（ようす）」が変わることが理由となること。
- ③ 新しい場面が変わる根拠となる言葉は、1文目にあること。
- ④ 書かれている言葉をしっかりと読みながら、いつも頭の中に「紙芝居の絵」を思い浮かべること。

学年が進むにつれ、教科書に載る短い物語でも、次第に「長編化」してきます。低学年で学んできたことを一から復習させるには時間がかか

るため、あらかじめ小さな場面の「箱番号」を提示し、「なぜ、このように小さな場面が分けられるのか、『根拠となる言葉』を探してみよう」と活動を焦点化すると良いです。

「小さな場面分け」に取り組み中で、中心人物が誰であるのか、そして、その人物に関わる「時・場・人物・状況」の「変化の大体」が読めてきます。「中心人物の（山場での）大きな変化」を捉えるための次なる段階として、「人物」「視点」の検討に入ります。

◇「人物」の定義 低学年

物語に登場する人のこと。ただし、人間のように話したり考えたりする「生き物やもの」も、物語では「人物」と捉える。

「人物」は、その物語における重要度に応じて、以下のように分けられる。

◇「中心人物」 低学年

物語全体で「大きな変化」を描く人物。

◇「重要人物（重要なもの）」 以下、中学年

中心人物の大きな変化に「大きな影響」を与える人物（もの）。中心人物と共に変化する人物となることもある。

◇「その他の人物」

出来事の展開に欠かせない人物。

○「視点人物」

「語り手」が「地の文（会話文以外の文）」で「心の中」を描く主な人物。

以下、今年度担任している5年生の子どもたちとのやり取りによって整理した、『おおきなかぶ』の「人物関係図」です。2つのパターンに分かれました。

◇『おおきなかぶ』の「人物」

- ① 中心人物……おじいさん
- ② 重要なもの……かぶ
- ③ 重要人物……おばあさん・まこ・いぬ・ねこ・ねずみ
- ④ 重要人物……ねずみ

④ その他人物……なし

④ その他人物……おばあさん・まこ・いぬ・ねこ

○ 視点人物……なし

語り手が誰の「心の中」も描かない。

「自分のかぶが抜けたおじいさんが中心人物」「抜けたかぶが重要なもの」という見解は一致しましたが、その変化に与えた影響の「捉え方の違い」によって、重要人物が③と④に分かれました。

③の場合は、「みんなで引つ張ったからかぶが抜けた」という捉え方から、「協力の大切さ」という主題を得ることができます。

対して④の場合は、「最後にねずみが加わったからかぶが抜けた」という捉え方から、「小さな力の大きさ」という主題を得ることができます。

物語の「読みの方向性」さえそれていなければ、「読みの多様性」は「主題の多様性」につながります。仲間と読みを聴き合うことにつながる、ということですが。

「一般的な正解はこう」という「正解到達主義の読解指導」が、ともすれば子どもたちから物語を読む楽しさや喜びを奪ってきた側面があることを、今一度、戒めたいところです。

「中心人物の山場での大きな変化」を捉えるための次段階で取り組むのが、「大きな場面分け」の検討です。その結果、以降の学習を貫いて考えることになる「中心発問」が見えてきます。

◇「大きな場面」の定義 中学年

①【設定】

物語全体のおおもと「時・場・人物・状況」が説明される場面。

②【展開】

「山場」に向かって出来事が動き出していく場面。「中心人物」が変化していくこともある。大きな場面の中で最も長い。

③【山場】

「中心」人物に関わる大きな変化が描かれる場面。「山場」には「入口」と「頂点」の場面がある。「山場の頂点での大きな変化」から、「感想（主題）」を受け取るための「中心発問」を

得られる。

④【結末】

大きな変化のその後が描かれる場面。「設定」と対応している。

◇「4つの設定」

①「時」の設定……いつの出来事か。(時代・年・季節・月・日)

②「場」の設定……どこで出来事は動き出すか。

(出来事の舞台となる場所)

③「人物」の設定……誰が「中心人物」か。

④「状況」の設定……「中心人物」が「どのような人物」か。ほ

かにも「重要人物」との関係、生活状況など。(「大きな変化」との関連)

○長い物語ほど複数の「小さな場面」で構成される。

○「設定」か「結末」(あるいは両方)を持たない物語もある。「設定」がない場合は、「展開」で「4つの設定」が説明される。

○「4つの設定」が全て説明されるわけではない。

先の「人物」を検討してきた子どもたちにとって、『おおきなかぶ』では「おじいさんのかぶが抜けた場面」が「山場の頂点」であることを、捉えることができます。

これまでの学習と「大きな場面」の性質を踏まえると、「山場の頂点」「山場の入口」「展開」「設定」「結末」の順に捉えていくことが、子どもの思考に沿っているといえます。子どもたちとのやり取りを、かいつまんで紹介します。

T 「おじいさんのかぶが抜けた場面」が「山場の頂点」だとすると、その「入口」はどの場面？

C 「ねこがねずみを呼んできた場面」。ねこがねずみを呼んでかぶが抜けているから。

T 「山場の入口」に向かって出来事が動き出したのはどの場面？「展開」の始まり、「発端」ともいいます。

C 「おじいさんがかぶを抜こうとした場面」。最初は一人で抜こうとしていたから。

T その前の「おじいさんがかぶを植えた場面」は？

C 「設定」。「かぶを植えた状況」を説明しているから。

T 最後に「結末」を考えてみたいんだけど、「おじいさんのかぶが抜けた場面」に続きはある？

C ない。「結末」がない。

そして、「中心人物の山場の頂点での大きな変化」から、「なぜ、おじいさんのかぶが抜けたのだろうか」という、「感想(主題)」を受け取るための「中心発問」を得ることになります。

「あらすじ」粗い筋道」であることから、物語の「大體を読む」段階の総まとめと位置付けています。

◇「あらすじ」の定義 低学年

物語の出来事の「大體の流れ(粗い筋道)」を短くまとめた文章。

◇物語の「あらすじ」のまとめ方

①物語の小さな場面の「時・場・人物(の言動)・状況」に関わる「大切な言葉」を、なるべく短い1文にまとめる。(中心人物に関わる大きな変化が描かれる場面)は2文でも可

②それぞれの場面の1文を合わせて「あらすじ」にする。

「小さな場面分け」同様、「あらすじ」は低学年で学んでいるため、言葉の観点である「時・場・人物・状況」を「穴埋め」にして活動を焦点化し、出来事の大體の流れを捉えさせるのも良いでしょう。ただし、中心発問の読みにつながる表現、問いに対する意識を持たせることが重要です。

最後に、主題(後発の感想文)を受け取るための中心発問「なぜ、おじいさんのかぶが抜けたのだろうか」の精読(物語の「詳細を読む」段階)ですが、これは「物語を読む意義」の項をご参照ください。ここままで、ワークテストレベルの読みはつくれると思います。

ただし、中心発問を読むために、教師は様々な補助発問をします。これを「教師が発する問い」他問(受動)ではなく、「子どもが発する問い」自問(能動)とする視点を持ちたいところです。

中心発問を読むための「重要発問」、例えば『おおきなかぶ』なら、「な

ぜ、ねこがねずみを呼んだのだろうか」という問いが子どもたちから出されれば、それが「読む動機付け」となります。

どの自問を重要発問として取り上げるのかを検討する時間、重要発問について対話する時間を十分に確保することで、より「主体的・対話的で深い学び」に近づきます。そのためには、毎日の音読を課されている子ども以上に教師自身が物語を読み込み、その作品世界に魅了されることと何より大切であると考えています。今年度、『注文の多い料理店』の研究をしました。冒頭の一文からでも、見えてくるものがたくさんあります。

設定

①「小さな場面分け」の根拠となる言葉↓「しんしん人物」

①2人のわかいしんしが、すっかりイギリスの兵隊の形をして、ぴかぴかする鉄ぼうをかついで、白くまのような犬を2ひき連れて、だいぶ山おくの、木の葉のかさかしたとこを、こんなことを言いながら、歩いておりました。

(1)物語の冒頭の1文は、結びの1文と照応関係にある。中心人物である「2人のわかいしんし」が、設定、展開、山場を経て「しかし、さつきいっぺん紙くずのようになった2人の顔だけは東京に帰っても、お湯に入っても、もう元のとおりになおりませんでした」となる結末を暗示している。それは、紳士の「若さ」「未熟さ」が招いている。以降、見えてくる様々な人物像も、ここに収斂していく。2人の（考え方が同じである）紳士のやり取りが、互いの未熟さを増長させていく点も見逃せない。

(2)文明的なスタイルだと気取り、強く見せようとしている。また、生き物を殺すための道具や犬を持っている。「見栄っ張り」で「金持ち」であるといえる。

(3)この作品が書かれた1921年は大正末期であり、イギリスは第一次世界大戦の影響により衰退期を迎えていた。しかし、賢治はそれ以前の産業革命や軍国主義によって築き上げてきた強国のイメージを、自らが捉えた作品観（『宮沢賢治全集』参照）のキーワードとなる「都会文明と放恣な階級」に重ね合わせたのかも知れない。「見栄っ張り」「金持ち」を「都会文明と放恣な階級」の象徴として、紳士は「すっかりイギリスの兵隊の形をして、ぴかぴかする鉄ぼうをかついで、白くまのような犬を2ひき連れて」いたのだと読めなくもない。

④「だいぶ山おく」は、設定の「場」を表す言葉である。

(5)「木の葉のかさかした」は、落ち葉が乾ききっている状態である。猟期が冬場にまたぐことを踏まえると、晩秋ともいえないが、⑨段落「すすき」との整合性を図ると、「秋」が適当である。設定の「時」を表す言葉である。

教材分析から生まれた重要発問

「2人のわかいしんしが、すっかりイギリスの兵隊の形をして、ぴかぴかする鉄ぼうをかついで、白くまのような犬を2ひき連れて」から、何が言えるのだろうか

本当は、この辺りのことも詳述したかったのですが、字数の関係で結びとします。自作した資料の用意があります。少しでも気になったら一報ください。共に学び合いましょ。

〈自作資料集〉

- ・全ての物語単元で学習過程を踏む必要性
- ・教科書各社の物語用語の系統まとめ
- ・「自問自答」の進め方、言葉の「目の付け所」について
- ・「対話」の持ち方
- ・「ノート視写」ばかりでなく、時には「ノート写真」で
- ・「場面」と「章」の違い
- ・本文は「全文一枚」で
- ・「PISA型読解力」と「精査・解釈」「主題」の関連性
- ・教科書と原文を読み比べて見えてくること
- ・「変化」の中の「変容」、「教え過ぎ」の功罪
- ・『注文の多い料理店』ほか教材分析など

(仙台・長町小)

報告 高橋源一郎さん高校生公開授業

「ぼくらの学校なんだぜ！」



コロナの感染拡大により4年近く実施できず
にきた高校生公開授業ですが、昨年の11月18日
(土) 東京エレクトロンホール宮城を会場に、作
家の高橋源一郎(以下 源一郎)さんを迎え16名
の高校生と80名を超える参観者のもと開催しま
した。※文中の生徒名は仮名です。

【1時間目】 学校の意味

ジョン・ケージ作曲の『4分33秒』のごとく、
源一郎さんの授業は沈黙から始まった。人は日常
ある決まった形式やあり方を無意識に受け入れ、
それを常識として疑うことをしない。教師は話す
もの(教えるもの)、そういう常識にとらわれて
いる。源一郎さんは、沈黙で学校の常識を揺さぶ
り問うことから授業を始めた。

次に質したのは、教壇に立つ教師に向かって生
徒たちが一斉に座って授業を受ける、一斉授業の
形式。どうしてこのような形式なのか。ここでは
この形式が、実はベンサムの考案したパノプティ
コンという監獄の監視システムと同じであるこ
とが語られた。言わば高校生たちは日常、監獄の
監視システムの中で学んでいることになる。こう
して多くの生徒たちは、大学に入るまでに柔軟な
思考力を失う。それでは思考が最も柔らかく柔軟
なのは誰なのか? 源一郎さんは、それは様々な
社会的地位や所属の束縛から解放された高齢者・
老人たちだと、会場の笑いもしつかり取りながら
答えた。

こうして教師のあり方を問い、教室のあり方
を問うてきた源一郎さんが、さらに問い質したの
は、日本の近代学校システムの成立とその役割で
あり、具体には日本の近代学校制度が大学↓小・
中学校↓高校という順で整備されていったその



理由(意図)だ。ちなみに世界中の近代国家も、
ほぼこの順で学校制度が整備されていったとい
う。この順番に一つの理由が、そして秘密がある。
授業では精神分析学者の岸田秀さんの説を紹介
した。まず大学を作ったのは想像がつく。優秀な
人材が必要だからだ。封建制社会から近代科学を
ベースにした社会になるためには、まったく新し
い知識が必要になる。とにかく知識がある人を育
てて国家の中枢を担う学者や役人を緊急に養成
しなくてはいけない。つまり支配階級を中心を担
う人材をつくるためだ。

日本の帝大は国家がつくったが、中世の頃か
らある大学は別の作られ方をしている。どこかの
ものすごく頭のいい人が生徒を集めて塾をつく
る。その塾に、あの先生はすごいと人が集まって
くる。他にも錬金術ならこの先生、聖書ならあの
先生というように、いろんなところに塾ができる。
そこでそういう塾がいくつか集まってスタート

したのが中世の大学。だから個人塾連邦で、エリートをつくる国家の大学とは違う。どうしても勉強したいという人たちが同じ場所に集まって、そのうち大学というものになって行ったのだ。だから大学の先生は基本的に個人営業で、何を言ってもいい。こうしてできた大学と国のエリートをつくるためにできた大学は、本来けんかする仲。もし君たちが大学に行くなら、まだ生き残っている頭のおかしいクレージーな先生を選んで、そういう大学に行って刺激を受けてくるのがいいと源一郎さんは語った。

さて、では次に高校でなく、なぜ小・中学校が整備されたのか？ 源一郎さんは、岸田秀さんの本を読んで衝撃を受けたという。封建時代の日本は7割、8割が農民だが、近代国家になって工業化が始まると多くの工員が必要になる。そのため農民を工員にしなくてはならない。ところが農民は、そのままでは工員にはなれない。ここに近代の学校が何のために作られたのかという秘密が隠されている。実は、農民は自然の移り変わりに合わせて農作業をしている。要するに「自然時間」の中で生活している。他方、近代国家になって工場で働く工員は、時間通りに工場に来て、時間通りに働いて、時間通りに帰ることが求められる。つまり「自然時間」にもとづく農民のマイナンドを「時計時間」にもとづく工員のマイナンドに変えるシステムが必要になるのだ、それが学校。だから学校で一番大事なことは、始業時間にちゃんときて時間通り授業を受けること。別に字を覚えてなくてもいい。時間さえ守って、授業中45分座っていれば、いい子。これが小学校で習うことの秘密である。要するに今ここにいる高校生たちも、農民を工員にするシステムの中で学んできた

と言えるのだ。

そして、2時間目までに「私」というタイトルで文章を書くことを宿題（課題）に出し、1時間目の授業を終えた。

【2時間目】 自分の先生

話し足りなかったのだろう。2時間目の本題に入る前に、1時間目の授業に関わる話をした。まず、近代の学校制度が工員だけでなく、兵隊をつくるためでもあることを補足した。それから、源一郎さんが中・高と通った進学受験校での地獄のような日々の異常さについて。さらに日本のような小学校の入学「式」は世界でほとんど行われていないことや、実際に子どもの入学式に行った時に目撃した不思議な光景（ステージの真ん中には何も無いのに校長先生がお辞儀する）など、日本の学校のふしぎ発見「ここがヘン」について語っ



た。一通り1時間目の授業に関わる話をして、休み時間に書いた「私」をテーマとした、2時間目の授業に入った。

冒頭、源一郎さんは、宿題とした「私」は厳密に言うとは宿題ではなく授業の教材であること、したがって、これから始まる授業は、高校生たちが書いた自前の教材で行う、高校生自身がつくる授業だと話した。また大学でも同様の授業を言語表現法として行っており、この授業は、たぶん「日本で一番いい授業」で「全員の文章がうまくなる」「神授業」だと語り、みんなの笑いを誘った。これから始まる授業への関心を引くための言葉とも言えるが、これは源一郎さんによる近代学校教育システムへのさりげない宣戦布告だ。

何食わぬ顔で宣戦布告した源一郎さんは、そくさと一番前の端に座る鈴鹿さんのもとに歩み寄り「はい鈴鹿さん、読んで」と指名した。突然の奇襲ならぬ指名に戸惑いながらも立ち上がった鈴鹿さんは、「私」というタイトルで書いた自らの詩を朗読。すると今度は、隣に座っていた伊藤さんに「じゃあ感想をどうぞ」と促し、びっくりしつつ「しつかり自分と向き合えていると思います」と応えた。

授業は、以上のように生徒が自ら書いた文章を朗読する。そして他の生徒は、それを聞いての意見を述べる。ただし次に意見を言う人は、前に言った意見と同じ意見を言ってはダメ。必ず違ったことを言わなければならない。言えなくなったら、言うまで源一郎さんが横に立っているという、いたってシンプルな授業だ。しかし自ら「日本で一番いい授業」「神授業」と豪語するだけあって、そこには近代学校教育システムに対抗する作法（秘策）が隠されていた。

一つ目の作法は、生徒の書いたものを一切添削しないということ。その理由を、自分が添削されるのが嫌だからと語ったが、それは書くことを生業にしている者にとって至極当たり前のことのように思われる。なぜなら書き手にとって添削は、されればされるほど自分の書いた文章ではなくなるのだから。このことを授業では、作家の小島信夫さんが軽度の認知症になり書いたもの的事实関係や整合性に明らかな誤りがあっても校正（添削）を拒否したというエピソードを交えて話した。

添削しない理由は、それだけではないように思われる。添削をするところには《教える者》と《教えられる者》という一つの権力関係が生まれるからだ。源一郎さんが1時間目の授業を通じてずっと問題にしてきたのは、学校・授業の中に見え隠れする権力関係だ。そして、そういう関係性のもとは本当の学びは成立しないと考えているのだから。

二つ目の作法は、一つ目の添削をしないことと関わっている。《教えない》状況の中でも《学び》が成立するための、その学びの仕掛けが必要なのだ。その秘策をどう見出しうるのか。源一郎さんは、それを渋谷109のファッションビルで働く魅力的な店員さんたちに見出した。あるとき源一郎さんは、109で働く店員さんたちに「なぜ、みなさん魅力的なのですか」と尋ねた。すると、全員に共通する一つの答えを見出した。それは《いつも見られているということ》。つまり店での立ち居振る舞いからすべて見られているという、外の目を常に意識することが、店員さんたちの魅力を生み出しているのだ。では、それを文章表現の授業に当てはめると……、それは《みんなに聞

いてもらうこと》になる。自分が書いたものを自分で朗読するのは恥ずかしい。でも、そうすることで周りの反応がよくわかる。自分が文章を読む瞬間瞬間に、まわりがそれをつまらないと思っているか、おもしろいと思っているか、すごいと思っているか、そういうことが手に取るようにわかる。読んで反応があつて批評される。実は、生徒としてここにいる君たちが一番いい先生。自分たちが教材をつくって、自分たちで批評して、自分たちで成長していく。先生は、基本的にはその間に立って、コーディネーターとして最小限のテーマやアドバイスをするだけだと語った。



とは言っても、自分がどのようにして作家になったか考えると、やっぱりどこかで誰かに何かを学んできた。では、その先生は誰？ と考えて気づいたという。それは「本棚」だと。大抵の本は1回読んだらそれでお終い。だけど10回、20回と読む本がある。例えば夏目漱石の『こころ』は、読むたびに漱石が源一郎さんに違うことを言ってくる。漱石が違うことを言うわけではない。それは読む自分の方が変わったということ。読む自分が変わったから、読むたびに本のなかに新たなものが見えてくる、発見がある。つまり、その先生に会いに行くと、自分の成長度合いがわかるのだ。10年前にはわからなかったけど、こういうことが大事なんだとか、こういうことを書くんだとか、先生は道しるべ。その道しるべとしての先生は自分で探し出すもので、それは実在の先生かもしれないし、本のなかの先生かもしれないし、もしかするとモノかもしれない。それがみんなを成長させてくれるはずと高校生たちにエールを送った。

このように2時間目の授業について語りながら、鈴鹿さんに続いて、自分の癖について朗読したのは飯坂さん。その飯坂さんの文章について「もう少しいところも書きながら、それにプラスして悪いところも書いていくともっとよくなる。自分のいいところと悪いところをまた見つめ直すことで、もっとよりよくなっていくんじゃないかと思えます」と、山野さんのまさに学校の先生のような「立派」なアドバイスに会場みんなびつくり目をみはる。そんな山野さんに間髪入れず「じゃあ、山野さん読んでみて」と源一郎さん。自分にお鉢が回ってちよつとバツが悪そうに席を立ち、「私、山野奏多。以上」と一声発つして、会場は一瞬キツネにつままれたように。それへの感想を求められた隣の水田さん、困りつつ「なんか、ずいぶん指摘するのはうまかったけど……」と言いよどみ、絶妙のタイミングで「指摘してるからどうなるかなと思っただけど、書いてないじゃない」

と源一郎さんの一言に、会場全体があたたかい笑いに包まれた。

この授業で、自分が書いた「私」を朗読したのは時間の関係でわずか4人。わずか4人でも、とてもおもしろかった。なぜ、おもしろいのか。高橋源一郎さんは、それは制約のない文章を書いているからだという。学校で書かせているのは、例えば何字以内で書きなさいというような制約のあるもの。自由作文というけど「自由」がついている時点で、すでにそれは嘘。ほんとは不自由

《高校生の感想から》

◆ 学校とは何か、教育とは何か、学びとは一体なんなのか。これらの本質を教えられたことはありませんでした。教えられなかった、というより自分で考えようとするところがありませんでした。これが普通、何もおかしいことはないと思込んでいたからです。今日の授業を受けて、自分から知ろうとする学びの姿勢を忘れないようにしていこうと思いました。

◆ 学校という場所について、もう明日から通いたくなくなるような一つの解釈をくれる面白いお話だと思いました。

日本における学校は、社会の馬車を作るための教場であると信じていたので、そういう社会の歯車になりたくないと思いつけていたので、

だから、あえて「自由」と言っている。その一方で、今日のように自由に書いていいよと言われても、それもなかなか実は難しい。大学では、最初と最後から2番目の授業で「私」について書いてもらっているという。1回目は、私の出し方を知らないから私が出てこない。これまで私を抑えることばかり教わってきたから。でも2回目の「私」では、その人の私が出てくる。つまり自由になるということは大変なことで、トレーニングが必要。しかし、そのトレーニングは強制でやらされるような

その考えがより一層深まりました。

◆ 自分で考える授業っていいなあと思いました。人の目を気にすると自分を磨くことができるって改めて思いました。今進路で悩んでいたのも、もつと自分がやりたいことをしてもいいのかなと思いました。楽しかったです。教育の形ってどんどん変わっていくんだなと思いました。「私」のテーマでみんなが書いたものを見たかった。私の詩の感想を作家の視点から少し聞きたかったです。

◆ 大学はやく行きたいなと思った。でも大学受験は嫌だなと思った。◆ 何もかもが新鮮に感じられました。日常の中にある普通はとて

きゆうくつなもので、それが人の頭をかたくしてしまふのかなと感じられました。社会で働くために学ぶと社会のロボットになってしまうので

トレーニングではない。信頼しあった仲間たちと一緒に作り上げていくトレーニング（授業）でなくてはいけなさと語った。最後に、改めて先生は教える存在ではなく、学ぶ人をサポートする存在であるということ。そして、この世のなかのおもしろい人、モノ、本を探し出して、それを自分の先生にして、不自由な社会を生きていくための知恵を大いに磨こうと語って、2時間にわたる公開授業を締めくくった。

(文責 清岡)

はと思つてしまいました。先生だけが話す授業よりも生徒も緊張感をもちつつ発想力も養っていく授業の方が面白いと思いました。◆ すごく刺激になりました。いろいろな本を読みたい。

◆ 「学校」ということで『教育者はこうあるべき』というような難しい話を想像していましたが、先生を否定するようなお話でもしよかったです。私は本をあまり読まないのを読んでもみようと思いました。私は将来こどもや学生と接するような職業に就きたいと思つて参加させていた

◆ 特に多くの文字を書いてノートを取るわけでもなく、たくさんグループワークをしたわけでもないのに、源一郎先生の言葉が新鮮に残つ

ています。120分間の授業が一瞬に感じるような濃密な時間でした。何が正しくて何が悪いのが大事ではなく、どう感じて、考えて、行動するのか。とてもありがたい経験をさせていただきました。ありがとうございました。

◆ 高橋先生の話し方は伏線を張っておき、最後につなげるような形なので話を聞いていてあきることがなく、常に興味を持ちながら話を聞くことができました。ただし、先生の今回の授業を、ただ聞いて終わりにするのではなく、その真偽を確認しながら、先生の話さらさら昇華させていきたいと感じました。

◆ 普通に生きているのならば、味わえないような経験を得ることができました。

次回もなにかめずらしいものがあれば参加したいです。

北海道で高校教員として14年勤務し、今年度より宮城県に移住してきましたが、その新たな1年が終えようとしています。『私の出会った先生』のお題で、紙面が埋まるほど書けるのかなと不安になりました。というのも、自分が学生時代の先生に全く思い入れもなく、「なんで先生になりたかつたんですか」と生徒に聞かれても、正直に「自分が高校生のときの先生は、早く帰って暇そうだったし、教え方も微妙で、これで公務員なら将来は安泰そうに見えた」とは、20代の頃は言えませんでした（時代が変わりすぎ、教員のブラックさを目の当たりにしている今の生徒には、私の話が生徒の夢を壊すこともなくなつたので、最近では素直に教えますが……）。

わたしの出会った先生 43

生徒を鏡にして

森下 瑛 仁



を始めた頃から機械警備が導入され、守衛さんは廃止、放課後の学校の見回りは教員の役割でした。廊下を歩いていると窓が開いていて、とあるベテラン生徒指導畑の先生が私に、生徒指導は『割れ窓理論』（窓が割れたらすぐに直さないと割られる）だと教えてくれました。今考えれば、これはかなり乱暴で危険な考え方なのですが、そこそこ疑いもせずに自分の中に落ちたのは、「自分も学生時代に学校のことをたいして信頼してなかった」からかもしれない。進学校を目指していたその学校は統廃合の波にあらがえず、地元の農業高校と再編されるのですが

は前任校で学んだ『割れ窓理論』をD先生がどう思うか、率直に聞きました。「形あるものはいつかは壊れるんだから、直せばいい話だ」とおっしゃったことは、今でも覚えています。そのときは非常に感銘を受けたのですが、その先生のように達観した姿勢で生徒と接するも、2年目の私は全然うまくいかず（いまになっては無謀すぎる挑戦と笑ってしまいうくらいに恥ずかしい）、その先生の真似をすること、私に見せる生徒の姿の乖離がだんだんとつらくなくなりました。結果としてD先生とは距離を置いてしまいました。40代目の年齢にさしかかり、当時の

同年齢の先生方が私とD先生の師弟のような関係をどう見ていたのかなと思うときがあります。

最後に、私が毎日出会っている『先生』を紹介したいと思います。

それは日々接する『生徒を通して見える自分』です。『生徒は先生を映す鏡』と言い換えてもいいです。

近づきすぎると慢心になり、離れすぎると無責任で、自分の指導のことは見えてきません。さらに、見えたときには、どんなに自分の指導が情けなくても、生徒の責任に転嫁しても、最後は自分に返ってきます。「もっと他の手段は？」

前もつての支援や情報収集は？と。毎日ではありませんが、やはり年に何回かはこういう気持ちになるところがあります。そういうときにこそ、共感してくれる先生と巡り会いたいですし、私も同僚から頼られる先生になれればなあ、なんて考えるのです。

（岩ヶ崎高校）

頃の際は教員にはなつてないかもしれせん。誤解しないように付け加えますが、私は勉強や部活を自分で高めていくことが好きな生徒でしたし、この教職も今は好きです。

その当時の教員と生徒の距離感が古き良き時代なのかは賛否があるでしょうが、いづれにせよ教員になって最初の学校は、規律と勉強に厳しい学校でした。特に生徒指導は今なら「ブラック校則？」というもので、都会でそこそこの自由な学生時代を謳歌した私には、生活面（教員の共同団地でのプライベートのなき等）も含めてショックの連続でした。北海道では私が勤務

……

2校目は教育困難校での勤務でした。そこでは退職間際のD先生との、衝撃的な出会いがありました。専門高校だったのですが、とにかく授業が成立しない。専科の授業も成立しない。こちらが怒鳴り、逆に胸ぐら捕まれる。そんな日々が続きました。ですが、D先生の話には基本的に耳を傾け、放課後は体育教官室に生徒が遊びに来て、D先生の部活の生徒は夜遅くまで取り組むのです（規律面では多少のだらしなさもあつたのですが……）。その先生との放課後の巡回、窓が開いたまったく同じ光景があり、私

コロナ禍が終わった教室で

柘 圭一郎

昨年の5月8日から新型コロナウイルス感染症の位置付けが5類感染症になって、少しずつコロナ禍前にあつた日常が学校に戻ってきた。

今まで全校集会は、リモートが当たり前だったのが、夏休み前の朝会は、体育館で行った。実に4年ぶりだ。学習発表会も、1・3・5年と・2・4・6年には別れたが、4年ぶりに生の発表をお互いに見合つて、それぞれ良い刺激を受けていた。そして、つい先日に行われた「6年生を送る会」では、全学年が集まり、3年生の演奏で1年生と6年生が手をつないで入場するという本当にコロナ禍前の形で行われた。しかし、送る会の前に行った委員会の引継ぎの練習や集会委員の練習が思うように進まない。仕方ないのだ。なぜならこの4年間、全校で集まる送る会を誰も経験していないので、指導する教師にも子どもにもイメージがないのだから。その様子を見て、これは、コロナ禍によって失われたものの一つだと思つた。今まで当たり前に行い、続けてきた学校文化の一つがコロナ禍により一瞬途絶えかけたとも言える。話は変わるが、「学校文化」ということでは、飲み会もそうだ。今年度は、6月から職員クラブの飲み会も解禁され、行事の打ち上げや、忘年会も久しぶり開催された。4年ぶりの開催に最初は自分も、そして、先生方も雰囲気というかノリを忘れていた。また、新卒から4年以内の若い先生は、そもそもどういふものかも知らない。そんな中、異常な静けさの中、当番長として挨拶をした。しかし、学校文化？ いや職場文化の継承のために我々中高年組が大いに張り切り、最後には、恒例のゲーム大会で大いに盛り上がった。若い先生方も初めての忘年会にうれしそうに参加していた。

しかし、コロナ禍前にあつた日常が学校に戻つ

てきていることに、安堵する自分がいる一方で、この4年で失われたものについてもっと注意を払う必要があるのではないか、という思いにこの1年ずつと駆られていた。それは、「発達」の観点から見たコロナ禍の代償である。今年は、5年生を担当していたが、同じ学年の先生方と子どもたちの様子を語るときにいつも出てくるのは、「幼い」というキーワードである。以前から子どもたちが幼くなつてきているということは、よく現場で語られてきており、そのことについては自分も感じてきた。しかし、それとも質的に違うことが子どもたちに起こっているのではないかと今は思っている。

京都大学教授の明和政子さんが、『マスク社会が危ない』という本を出している。明和さんはコロナ禍中から、他の諸外国に比べて、日本のコロナ対応が、子どもファーストでないことに危惧を抱き、日本の子どもたちの発達の危機だと警鐘を鳴らしてきた研究者である。明和さんの著書によると、脳の発達には、感受性期というものがあり、想像力、および社会性に大きくかわる前頭前野が発達するのは、4歳からと思春期であるそうだ。しかし、コロナ禍によって身体接触を禁じられ、相手の表情が読み取りづらいマスクを付けた大人に囲まれて生活してきては、十分に脳を育てることができない危険性があるというのだ。想像力とは、対人関係においては、自分の言動を相手はどう受け止めるかを考えることだ。そのためには、「自分」というものを持ちかり自覚した上で、他人も同時に「自分と同じ感覚を持つている」という共感能力が育つていることが前提だ。しかし、学級の子どもたちを5年生として見た時に、自分のことだけを考へて行動している子どもが以前に比べ増えているように思う。授業中の

ある学校「環境」として考えられる必要があるでしょう。確かに、施設の改修に関する費用が自治体に重くのしかかることもあるかもしれませんが。それでも、子どもたちの学びや生活「環境」と安直に天秤に掛けられることは、そこに対する地域や教育行政の責任が問われるものとして考えられる必要があるでしょう。

○GIGA スクールをめぐる状況も 教育「環境」であるならば

ここまで、「環境」として少し大きく構えてきましたが、日々の教育実践をめぐる、さらに具体的な「環境」もあります。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大を機に、全国的にその推進が一気に加速されたのが、各学校における「1人1台端末」と高速ネットワーク環境の整備でした（GIGAスクール構想）。GIGAスクール構想は、国レベルにおいて異様とも言える巨額が投入され、あっという間に各自治体や各学校への具体的な機器の配備という形で立ち現れたことはまだ記憶に新しいところです。

みやぎ教育文化研究センターでも、2020年、2021年と、研究部として調査・研究に取り組み、年報1号、2号としてまとめました。

このGIGAスクール構想の設備は一旦、条件を整備すればいいものではないということは、その当初から指摘されていたところです。目前に迫る大規模な「更新」をめぐる動向から目が離せません。また、端末の整備では家庭での負担が強いられている状況からも目を背けてはなりません。とくに宮城県では、高校段階で原則、各家庭で購入、補助制度がない「1人1台端末」というのは何とも不思議と言わざるを得ません。一方的に目指す「環境」が打ち上げられ、その整備の尻拭いを担わされることをどのように肯定できるでしょうか。

○環境は何も、物的なものばかりに限られない

学校において、子どもが働きかけ、子どもに働きかける「環境」としては、教師を中心とする人的な条件もあり得るでしょう。たしかに、教師の働き方を即座に子どもの教育「環境」とイコールというのは乱暴かもしれませんが。しかし、数多の教育実践が積み上げてきた到達点もあるように、子どもと向き合い続けてきた教師たちが子どもたちの学び、生活の場である学校「環境」を豊かにしてきた力の一端であったことは間違いないでしょう。教師としての人間らしい働き方を実現するため具体的な手立てを考えるべく、学校内外から世論を盛り上げていく必要があるでしょう。

最後に、子どもたちが過ごす教室の環境です。大人たちからの一方通行でお節な押し付けがましい教室ではなく、そこで学び、生活する子どもたちにとっての「環境」として考えてみませんか。

(岩手県立大学)

私語もそうだが、みんなで学習しているという感覚が全体的に薄い。また、クラスの仲間に対しては、相手に嫌悪感がなくても「面白いから」という理由だけで、仲間の間違いを大袈裟に指摘し、相手が嫌がっていることでも平気でやってしまう。それによって泣いてしまった仲間の様子を見てやっとなんかよくしようと見受けられる。自分の中には、「自分」しかない感じなのだ。大人になるとは、様々な他者を自分の中に育てていくことだと学んだことがあるが、5年生にしてはその他者が極端に少ない子どもたちが目立つ。また、身体接触を求めて、おんぶを求める子どもも数人いる。休み時間いつも後

ろで、体をぶつけ合って絡まって遊んでいる子どもたちだ。長く教員をやってきたが、5年生でおんぶは初めてである。もちろん、それらの子どもは一部であるが、やはりコロナ禍で失われたものに関わっているのではないかと考えざるを得ない。一方で、子どもとしては、変わらないものもある。発達途上であるが故の成長する輝き、真っ直ぐな瞳の素敵さは、毎年、変わらず教師の心を熱くさせてくれる。先日行われた「6年生を送る会」がまさにそうだった。だからこそ、教育の専門家として、発達保障の観点からコロナ禍で失われたものが何なのかを考え、それに対する意識的なアプ

ローチを学校全体で進めることが今求められているのではないか。先に、「幼き」として紹介した子どもたちの姿は、発達要求として子どもたちが我々に提示しているものであり、それに応えるのがプロの仕事である。学力向上やGIGAスクール構想に走るのには、発達保障の観点から言えば、そのずっと後に考えることである。なぜなら、ヒトは密な空間で、密な身体接触を通して様々な他者や自然と触れ合うことによってしか人になれず、脳は育つていけないからである。

(仙台・小学校教員)

●教育時評

学校の教育

「環境」問題

山沢智樹

今日、俄かに、さまざまな角度から環境問題への関心が高まっています。学校をめぐる現状を少し、「環境」という点に引き付けて考えてみたいと思います。

○自然災害との関係から考える

「学校と環境」と言えば、様々な説明が考えられるでしょう。

最近でいえば、毎年のような暑さ対策もその範疇に入るのでしょうか。仙台の2023年の夏では、最高気温が30℃以上の真夏日が66日を数え、25℃以上の熱帯夜が36日を数えました。テレビで夏の甲子園中継を付けると、L字に区切られた画面に高温注意情報や水分補給、エアコンの「適度な」使用を呼びかけているのを見た方も多くいたことと思います。また、宮城県消防本部のまとめによれば、2023年の5月～10月1日までの間において、緊急搬送された熱中症患者の数は、2,163人（5月：55人、6月：118人、7月：874人、8月：963人、9月：153人）にも上ります。もはや、危険な暑さと言っても過言ではありません。

そんな状況のなかで、全国の小中学校等の公立学校施設の空調（冷房）設備の設置状況は普通教室で95.7%、特別教室で63.3%、体育館等で15.3%（2022年9月1日現在）となっています。なかでも、宮城県の数字は次のとおりです。

小中学校の普通教室で99.9%（7,210/7,219）、特別教室で37.4%（2,827/7,566）、体育館等で2.8%（16/670）。幼稚園では、保育室で100%（224/224）、保育室以外で87.4%（104/119）、体育館

等で61.9%（13/21）。高等学校では、普通教室で100%（1,199/1,199）、特別教室で33.6%（841/2504）、体育館等で3.6%（7/193）。特別支援学校では、普通教室で100%（525/525）、特別教室で85.4%（452/529）、体育館等で0%（0/21）。

普通教室への設置はほぼ100%に近づいていますが、学校施設の統廃合を伴う学校再編の実施を見越して、仮設式のものであったり、特別教室や体育館を含めれば、まだまだ充実が追求されなければなりません。先述のように、毎年夏になると熱中症等での救急搬送のニュースを聞かない日はないなかで、子どもたちの学び、生活の場である学校「環境」について考え、整備していくことは、何ら難しいものではなく、しかし、先送りが許されない課題です。

学校に関する施設や設備面の問題に関してはさらに、今年1月1日に発生した能登半島地震でも明らかのように、地震大国である日本では全国どこでも、いつ大地震が発生してもおかしくない、ということを押えておくことが欠かせません。そうであれば、学校施設の耐震化も重要な視点ですし、震災発生後には学校施設は1次避難所等として、住民の生活の場にもなり得ることも考慮しておく必要があるでしょう。ここ宮城県でも、2011年3月11日の東日本大震災時の経験があります。

○止まらない学校廃校

しかし他方では、“異次元の”少子化や公共施設の再編等を理由にした学校統廃合の流れも日々、加速しています。2020年度の廃校発生件数は全国で、335件（小学校：227件、中学校：73件、高等学校等：35件）でした。2002年～2020年度の間には全国で8,580件の廃校が発生したなかで、宮城県では、205件（小学校：130件、中学校：47件、高等学校：28件）の廃校が発生しています。この発生件数は全国最多が北海道の858件、3番目が岩手県の311件である一方で、2番目には東京都の322件となっています。宮城県は17番目です。

今回、具体的な事例を確認している訳ではないので一概には言い切れませんが、廃校の進行は、少子高齢化の進行だけではない要素があることが推測されます。

また、地域ごとの事情もあり、廃校の発生や学校統廃合の全てが否定されるものではありませんが、検討の際には他の何事よりも、子どもたちの学び、生活の場で

日記・作文で 子どもを丸ごととらえる

小澤 登

日記・作文をずっと教育活動の中心に据えてきました。子どもたちが書いた日記や作文を読み、赤ペンを入れて返し、一枚文集や学級通信に載せて学級で読み合います。これを毎日続けてきました。このことよって、子どもと担任の距離が近くなり、また子ども同士のつながりを生むこともできました。さらに保護者との温かな関係を築くことにも役立ちました。手間のかかる仕事ですが、続けることで得られる教師としての喜びは、とても大きなものがありました。そこで出会った子どもたち（仮名）とその作品を紹介します。

気持ちよかった 四年 晃

きょう、角田に行ってきました。角田ばしをわたって二チイに行きました。食りようりばに行つて、いろいろかいました。いっぱいあるので、お母さんに「かご、もう一つもつてきて。」と言われたのもつてきました。かいものがおわたので帰ろうとしたら、どこかのおばあちゃんがいきました。そのおばあちゃんもかえろうとしていました。両手にもつをもつていたので、ドアをあけてあげました。そしたら、にこつとしてドアから出ました。それで、おばあちゃんが「ありがとうね。」と言いました。それでおばあちゃん

んはかさをさして行つてしまいました。ぼくはお母さんに「ああいうことをすると気持ちいいでしょう。」と言われました。ぼくは、「うん。」と言いました。

晃君は「トラブルばかり起こす子」でした。だからこの日記を読んだとき、晃君の意外な一面を見たような気がしました。でも、それは晃君に失礼な感じ方。「厄介な子」という先入観で見ているから、優しさを「意外」と感じたのです。晃君と付き合う中で、晃君の優しさは「意外」ではなく「本質」だったことがわかりました。

お母さんのしらが 四年 誠

お母さんの頭には、しらががいっぱいあるようになった。この間、お兄ちゃんがお母さんのしらがをぬいてあげた。その時は六本ぐらいあった。（お母さんもだんだん年をとって、おばあちゃんになるのかな。）と思った。でも、まだまだおばあちゃんになってほしくないな。だから、ぼくは、できるかぎりのお手伝いをしてあげて、しんぱいをかけないであげたい。いま、ぼくにできることは、弟のめんどうをみることに、おふるそうじ。ねこのめんどうをみることに。お母さんにしんぱいをかけないようにしよう。しらががふえたら、おにいちゃんといっしょにしらがをぬいてあげよう。

この時期、誠君の家では家族の不幸や入院が続いていて、仕事を持つているお母さんは本当に大変でした。誠君もよく「うちのお母さん、今大変なんだ」と言っていました。だからこそ生まれた作品です。よく「見た通りに書くんだよ」と言いますが、何でもかんでも詳しく書けばいいのではありません。誠君がこの日のお母さんの服装を事細かに書くことに意味はありません。お母さんの白髪に目を向けていることが重要です。目を向けているもの、目を向けなければならぬものを丁寧に書くことが大事だと思います。客観的なリアリティではなく、誠君の目を通した「内的なリアリティ」です。そして事実や現実をとらえることが生活意欲につながります。お母さんの現実を見つめていたからこそ、誠君は誰に言われなくても「自分がやれること」を考え実行しようとしています。事実や現実を見つめさせることは、作文や日記の大きな仕事だと思います。

私って 三年 美月

一月十六日に（自分って何だろう。）と考えました。自分はなき虫なのかな。あまえんぼなのかな。さみしがりやなのかな。いろんなふしぎの中の一つは、たぶん（自分って何。）というふしぎなのでしょう。でもよく考えたら、よく考えてみたら、けっかは（ああ、そうかあ。自分は全部なんだ。自分はなき虫で、あまえんぼで、さみしがりやで、おもしろくて、

元気な子で、美月なんだなあ。）とさいごにわかつたのでした。

長所も短所もひっくり返るめて「これが私」と言える子どもを育てたいなあと思います。だめなところばかり突きつけられる雰囲気の中からこそです。一人ひとりの自立への課題は冷静に見つめながらも（あなたはあなたでいいよ）というメッセージを送り続けることが、私たち教師の日々の営みの根本にあるのではないかと思います。

Kくんありがとう 三年 善澄

毎朝ぼくが学校に来ると、一年生のKくんがろうかだまててくれます。ぼくのすがたが見えて目と目が合うと、Kくんが教室のドアのまえにきてくれて「あけてあげるね。」と言ってくれます。ぼくは「ありがとう。」と言うと、Kくんが「どういたしまして。」と言ってくれます。ぼくは「また明日おねがいね。」と言います。

善澄君は車いすの子です。当時私は肢体不自由学級を担任していました。善澄君は自分でドアを開けることはできません。でも「自分でできることは自分で」よりも、善澄君とK君のこのかかわりのほうが大事だと思つたので、K君には「手伝わなくていいよ」とは言いませんでした。この日記を一枚文集にしてK君の担任に見せると、そのコピーをK君のお母さんに渡してくれました。翌日の連絡帳には「うちのKは学校でやさし

いことをしていることがわかり、嬉しくなりました。」と書いてあったそうです。人と人との温かいかわりの中でしか育たないものがあるような気がします。

まい日は・・・ 三年 大志

ぼくは、ある日おもいました。まい日はたのしい、とおもいました。たとえば、てつぼう、べんきょう、サッカー、おちてたきれいな石を見つけること、へいきん台、雪だるまつくり、やられてしんだふり……、ぜんぶ言うと同じかんがかるから言わないけど、こういうまい日があります。

こういう日記を目にすると、教師をやつててよかったなあと感じます。大志君はとても繊細でちよつとしたことで落ち込んだり思い悩んだりします。だから「毎日が楽しい」という感覚がその後ずつと続くわけではありません。いい時とそうでない時を繰り返す中で、自分と向き合い、対話し、少しずつ成長していきました。

子どもたちが綴つたものは、どんなものでもその子の今を表しています。書かない子にも「書かない、書けない」今があります。それを丸ごと受け止め、かわり、寄り添うことが私の仕事の土台になっています。



おすすめ映画

大山あけみ



『ほかけ』

塚本晋也 監督

2023年

終戦直後の「闇市」が舞台だ。戦争で奪われたものと、絶望と闇を抱えたまま混沌の中で生きる人を描いた作品である。

主演は趣里で、この作品撮影中にオーディションで「ブギウギ」のヒロインに抜擢されたそうだ。

福来スズ子とは真逆の役で、戦争で夫と子どもを亡くし、生きる希望もないなか残された半焼けの居酒屋で、体を売って一人暮らしをしている。そこにこの店を紹介された若い復員兵（河野宏紀）が客として現れる。同じころ空襲で家族を失い、闇市で野菜や果物を盗み生活している子（塚尾桜雅）も入りびたり、3人は家族のように暮らし始める。しかし安心して生活できるわけではなく、子どもは夢でうなされたり、復員兵はPTSDで半狂乱になり女に襲い掛かったりする。子どもは女を守るうとして、持っていたピストルで復員兵を撃つ。そして男は去っていく。女は子どもを「坊」と呼び、「自分の分は自分で稼ぐ。盗んではいけない。ピストルは預かる」と3つの約束をして共同生活を始める。女は坊を我が子のように思い、体を拭いてあげたり洋服を作ったりする。

坊は、闇市で知り合ったやさしいおじさん（森山未來）から仕事を誘われ、ピストルを持って出ていく。その男は必死で戦争を戦い、上官の命令で親友やたかさんの仲間も殺してしまったことを後悔している。上官の何事もなかったかのような平穏な生活を許せず、復讐する決意を固めていく。坊からピストルを奪い、上官を呼びにいかせる。殺してしまった兵士の名前を叫びながら上官を撃ち、最後に自死する。坊は居酒屋に戻るが、女は感染症にかかり、会うことを拒否する。坊と一緒に暮らすことを諦め闇市に戻り、どうにか皿洗いの仕事を見つめる。

戦争のもたらした傷や闇は深く、人それぞれ違う。大人が起こした戦争で、親を亡くし必死で生きる姿を、塚尾桜雅さん（小2）が好演していた。仙台出身ということもありこれからは応援していきたい。

（元中学校教員）



読書のすすめ（第15回）

矢部智江子

おすすめBOOK

『7年目のランドセル』

—ランドセルは海を越えて、アフガニスタンで始まる新学期—

写真家・内堀タケシ：国土社

お子さんのいらっしゃる方は、使い終わったランドセルをどうしているでしょう。

この本は、日本の小学生が6年間使い終わった後のランドセルがアフガニスタンに送られて、アフガニスタンの子どもたちに喜んで使ってもらっていることを紹介している本です。



アフガニスタンは、今も戦闘やテロが続いています。そのため、電気やガス・水道も整備されず、病院や学校も少ないそうです。子どもたちは、青空の下で勉強することもあります。

そんな子どもたちに、日本から、ランドセルが届きます。先生が、一人ひとりの名前を呼んで、ランドセルを渡すのです。

学校に机や椅子はありません。その時、机代わりにするのがランドセルです。

この本に登場するタルワサちゃんがお母さんにランドセルをもらったことを話すと、お母さんは、「神様がね、タルワサがお勉強したり、家でお手伝いしていたりしているのを見ていて、日本からプレゼントがとどくようにしてくださったのね。おめでとう。」と、タルワサちゃんに話します。それを弟や妹たちが、うらやましそうに見ています。そしてタルワサちゃんは、「みんな（弟や妹）も、学校で先生の話聞いて、いっしょうけんめい勉強し、家の仕事も手伝ったら、日本からぎっとランドセルが届くよ。」と話すのです。子どもたちは、みんなランドセルを心待ちにしています。

内堀さんの写真は、子どもたちの様子をよく捉え、子どもたちがランドセルをもらったときのうれしさが伝わってきます。3年生以上くらいなら理解できる内容だと思います。ぜひ、子どもたちに読み聞かせてほしいです。

この本には書いていませんが、まだまだランドセルは足りないそうです。保護者のみなさんも、ぜひこの本を読んで、ランドセルを寄付してください。

ランドセルを寄付して下さる方は、センターにお持ちください。5月いっぱい受け付けています。但し、宗教上の理由で豚革製のランドセルは送れません。歌手の平原綾香さんも寄付していて、絵本にそのランドセルが載っているの、見てください。（元小学校教員）



平原さんのランドセルが載っているのはこちらの本です。

みやぎ教育相談センター相談員

松谷 三喜子

相談センターには、親からの相談と当事者本人からの相談があります。

母親のAさんは、子どもの暴言暴力に悩まされ苦しんでいました。過去のことを引き出し、不平不満をぶつけられる日常に疲れ果て、「何とかしてほしい。どうすれば落ち着いた生活ができるのか教えてほしい」と藁にもすがりたい思いで電話をかけてきました。

電話での聞き取りで事実確認や子育ての振り返りをする過程で、子どもの将来の幸せのために、良かれと思って親の価値観を子どもの声や悲鳴に気づかず押し付けていたことに気づきました。子どもの「ありのままの自分を見てほしい」「認めてほしい」「抱きしめてほしい」「ほめてほしい」という承認欲求は何歳になっても持ちつづけます。『今が正念場、親が変わる時』と励まし、言葉のかけ方や、愛情表現、スキンシップの取り方、子どもの良いところ探しなど具体的な助言をしてきました。母親自身も自己肯定感が低く、夫に押し引け目を感じ、また周りに相談できる友人もいず、孤独な子育てをしてきた方でした。

相談センターを抛りどころに、

毎週のように、自分の言動や子どもの反応を報告してきました。子どもの言動に一喜一憂しつつ、子どもとの関係をよくしたいという思いが伝わってきました。相談員との信頼関係もでき、「頑張っているね」と褒めたり、叱咤激励をしたりしてきました。親の本気さと変化が子どもにも伝わり、子どもとの関係性が良好になってきました。

相談の電話は毎週から、月1回、3か月ごとと回数も少なくなっていきました。その後、しばらく途絶えていたAさんから「おかげさまで、子どもが念願の志望校に入学することができました。適切で具体的な助言のおかげで、一歩前に踏み出すことができました。毎日、あきらめてはいけなかったとつくづく感じています。朝起きられずに、遅刻することもあり、つい口出しすることもあります。抑えています。通学時間や新しい環境に慣れるまで、精神的なストレスを抱えこまないように、話を聞いたり、一緒に出かけたり、できるだけ楽しいことをしようと心がけています。まだまだ安心はできませんが、先走った言動を慎んで見守っていくつもりです。いろいろありがとございました。」その

後の経過が気になっていたので、当時の悲痛な声とは違い、弾んだ明るい声が聞けてうれしく思いました。

母親が変わることで、子ども自身の育ちなおしと父親を巻き込んだ家族のあり様も変わってきたように感じました。

その後、区切りの時期に近況報告があり「一緒に暮らして楽しいし、どん底を味わったからこそ今が幸せと感じています。何よりも、子どもからありがとこの言葉が聞かれるだけで十分です。」と話していました。また、新たな心配事についても「先回りの心配はやめて、今の気持ちを忘れず、子どもを信じて任せましょう」と今後も励ましていきたいと思えます。

「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL 022-272-4152

相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・
家庭生活・教職員の悩みなど。

土・日曜と祝日をのぞき10時から17時

ただし夏休みなど長期休業期間は、相談センターも一定期間、休業日があります。

秘密は厳守します。相談は無料です。

子どもは賢くなっているのか？

高橋 正行 (宮城県高等学校・障害児学校教職員組合)

私は1986年教師になり、鶯沢工業高校に赴任した。最盛期は過ぎていたものの県内唯一の鉱山・細倉鉱山がまだ操業していた。鉱山長屋に住み、鉱山で働く人々や家族・子どもたちと共同浴場に浸かり、時には宴会も一緒だった。学校は牧歌的たたくまの中にあり、生徒も保護者も素朴だった。授業が終わると生徒たちを誘って温泉に行き、季節の移り変わりを満喫し、毎日が楽しい日々だった。夕方になると生徒たちが部屋に遊びに来て一緒に勉強した。「授業時間確保」「進学率競争」等々、口うるさく言われる前の時代である。ほんの38年前なのに隔世の感がする。

数年前、片づけをしていた時、昔の授業プリントや試験問題が出てきた。テーマの本質を突いたプリントや試験問題に驚きと新鮮さを感じた。当時、成績をつけるのに欠点の多さに悩んだり、苦勞した記憶はほとんどない。生徒もそれなりに勉強し、理解してくれたのだと思う。

夏休みが短くなり、授業時間が7時間、8時間と長くなり、子どもたちは競争の世界に駆り立てられている。しかし、本当に子どもたちは賢くなっているのだろうか。平和が危うくなり、環境破壊がすすみ、格差社会が広がる中で、学ぶ意味を問直すことが求められていると思う。

子どもの風景 「作品について」……川村 美和 (宮城作文の会)

自然体験を通じて子どもの感情を育てる

あおくんの作文を読み、私もあおくんと同じように、小さい頃は雪遊びが大好きだったことを思い出します。雪が降るとうきうきし、雪が積もるとすぐさま弟と外へ飛び出して雪遊びを楽しみました。学校では、用務員さんが雪の滑り台を作ってくれて、何度も友だちと滑って遊びました。

しかし、近年では雪が積もることは珍しくなっています。わたしは、子どもたちに雪の冷たさを感じながら全力で遊んでほしいです。大きな雪玉を作るには一人の力では難しく、みんなで協力する必要があるかもしれませぬ。また、「雪玉をこわされてしまったてくやしい！」という経験もすることでしょう。このような経験が子どもの感情を大きく育てていくように感じます。

情報化社会の今ですが、自然の中でしかできない体験も大切にすることで、子どもたちはより人間らしく、豊かな人生を送っていただけるのだと思います。

センターの動き

1月

12日(金) 第15回事務局会議

14日(日) 第68回宮城民教連「冬の学習会」講師 白木次男さん

15日(月) ゼミナールStudy『人間とその術』第7回

20日(土) 午前:『教育1月号』を

読む会(宮教大) 午後: 第10回

読研部

2月

3~4日 宮教組のO・D・O・C教研(松

島) 講演 山極寿一さん

5日(月) 「道徳と教育」学習会: 山片蟠桃

16日(金) 第16回事務局会議

17日(土) 午前:『教育2月号』を

読む会 午後: 第10回「震災の

つどい」報告3・11高校生様

性者調査

19日(月) ゼミナールStudy『人間

とその術』第8回

23日(金) みやぎ教育文化研究セン

ター30周年記念 佐藤学講演会

『子どもと学校の危機、どう克

服するか』会場75名 オンライン

ン高教組45名視聴

3月

3日(日) 宮城革新懇シンポジウム

「新しい社会の主体者として考

え・行動する市民を育てる教育

とは」(戦災復興記念館)

5日(火) 第4回国語世話人会

8日(金) 第17回事務局会議

9日(土) 午前:『教育3月号』を

読む会 午後: 第11回研究部
年報4号の内容

29日(金) 第18回事務局会議 「つ
うしん」114号発送

編集後記

1994年2月19日みやぎ教育文化研究センターが設立されました。当時、私は白石市で小学校教員をしていました。研究センターは私の教員生活と共にありました。年に何回か開催される教育講演会・教育講座に参加することは、私にとって大きな楽しみでした。今年2月、そのセンターが30周年を迎えました。2月23日の設立30周年記念「佐藤学講演会」には、会場・オンラインを合わせて100名を超える参加者がありました。6月には「記念シンポジウム」を開催する計画です。ご期待ください。

今号は、昨年の「みやぎ教育の集い」に出されたレポートを中心に特集しました。学校現場での授業・学級づくりこそが、現在の教育危機を乗り越える鍵になると考えます。新学期、学校の先生・子どもたち・保護者のみなさん、そして、能登半島地震に遭遇した方々に心を寄せながら、研究センターはこれからも応援し続けます。

(達)

【お詫びと訂正】
前号の「ジェンダー問題と学校教育」の執筆者遠藤恵子さんの肩書きが誤っておりました。正しくは「東北学院大学名誉教授」です。訂正をしてお詫び申し上げます。

